

エンジニアパーク

Engineer Ring Park

時はバブル時代、都市の再開発が活発なころ、私はコンクリート会社に就職し、まともな休みも無く毎日毎日、ビルやマンションの現場や工場内でコンクリート試験に明け暮れておりました。

その後、1991年に建設コンサルタント（現在の前身の会社）という職に飛び込み、道路計画分野の部署に配属され、主に道路の概略・予備設計やインターチェンジの設計等を経験してきました。

特に、安全性や環境への配慮、経済性や利便性を考慮した設計を求められる中で、技術的な工夫や他分野との調整が欠かせない仕事でした。また、法律に基づく用地補償関連業務にも従事したことで、適切な文章力を身につけることができたことは、論文試験においても求められる「明確に伝える力」に大いに役立ちました。

技術士に合格したことで、自分の立場や責任をより深く考えるようになりました。これまでは現場の技術者として問題解決に取り組んできましたが、技術士としてはさらに広い視野を持ち、社会に貢献できる技術の在り方を追求する使命を感じています。

今後は、自分の専門知識を活かして、技術の発展に貢献するとともに、後進の育成や資格取得支援にも努めていきたいと考えています。

また、最近は「体力のバブル崩壊」を感じる今日この頃ではありますが、技術士の資格取得はゴールではなく、ここからが新たなスタートと認識し、これからも研鑽を重ね、より良い技術者を目指して努力を続けていきたいと思っています。

堀田 潤一郎（ほった じゅんいちろう）

●建設部門（道路）

勤務先

株式会社 北未来技研



→次号は、高橋正名さん（建設部門）

私は、道内の田舎町に生まれ、子どもの頃は家のすぐ裏にある山や草むらで遊んで育ちました。大学では植物ゼミに入り、植物観察を楽しみました。そのような縁もあり、現在の会社に就職しました。私が入社した頃、上司が技術士試験にチャレンジしており、合格した姿を見ていました。しかし私は、技術士補の試験に苦勞し、「これは私には無理だなあ」と数年間受験しないという不真面目な期間がありました。20代はのんびりしていましたが、やがて、「技術士が受かったらカッコいいなあ」と思うようになり、30代のうちに技術士に合格することを目標としました。いつも私のモチベーションは「これができるってカッコいいな」という単純なものだった気がします。

技術士の試験は、日々の仕事の中で必要な知識だったので、「勉強する」という感覚はあまりなく、また、文章を書くことには苦手意識がなかったので、技術士補の試験よりも私は取り組みやすかったです。“論理的な文章を書く”ということには徹しました。

技術士の勉強を通して、わかりやすい資料作りや関係機関との利害調整等の技術士に必要なコンピテンシーは、管理技術者としてさらに意識するようになりました。「どんな仕事をどんな人たちとするか」、その時に担当する仕事の運や縁は大事だなと思います。最近は、学会等を通じた社外の人との関わりも大事だなと実感しています。社外のそういう場に私を連れ出してくれた上司に感謝しています。

今後も、「カッコいい」と思う自分になるため、また、後輩からも少しでも「カッコいいな」と思ってもらえるよう、前向きに、どんな時でも楽しく、いろいろなことに興味を持ち仕事をしたいです。

千葉 悠子（ちば ゆうこ）

●建設部門（建設環境）

勤務先

（株）北海道技術コンサルタント



→次号は、玉田祐介さん（建設部門）